

ペアで進む森づくり!

●みどりの季節を前にして・・・!

明日からゴールデンウィーク、緑が眩い季節です。そんな季節を前にして、28日の埼玉新聞に「浦高、一女の同窓会 ペアで進む森づくり」という特集記事が載っていました。小川秀樹さん(埼玉新聞社社長)が聞き手で、埼玉県知事の上田清司さん、内藤勝久さん(NPO百年の森づくりの会理事長、埼玉県みどりの再生県民会議委員)、川本宜彦さん(浦和高校同窓会前会長、サイサン会長)、川野幸夫さん(浦和高校同窓会会長、ヤオコー会長)、菅野良子さん(浦和第一女子高校麗風会前会長、同会顧問)、中村修子さん(浦和第一女子高校麗風会会長、元東京都福祉局参事、県森林審議会委員)による座談会です。

＊

●熱い思い 知事と語る

昨年11月14日、県立浦和一女高同窓会(麗風会)が開校110周年を記念して、寄居町風布の里山で植樹祭を実施した。同所は「浦高百年の森」の隣接地。埼玉を代表する両校による植栽活動は県内の森づくりを加速させる大きな引き金になりそうだ。「みどりと川の再生」に取り組む上田知事と両校同窓会の新旧会長、百年の森づくり運動のNPO代表者に熱い思いを語っていただいた。

◆小川：まず、上田知事から県が取り組んでいる「みどりと川の再生」についてお聞かせください。

◆上田知事：行政は、案外長期的なことができず、今ある危機への対応が多い。

この30年間で6500haの緑を失い、その面積は、東松山市や春日部市と同様です。

「緑のトラスト基金」で、この15年間で守ったのは60ha。もちろん意味はあります。でも失なった6500haの平地林をカバーするだけのパ



ワーを行政は持っていない。しかし、自然保護や環境派の皆さんはそういうことに警告を鳴らしていたわけですね。そういうことを受け止める力がなかった。【写真①：以下の写真も埼玉新聞より転載】

8年間でその緑地を再生するにはいくらかかるのか試算しました。毎年14億円ほどかければ、だいたい面的にカバーできることがわかりました。その財源として「自動車税の県税分の約1.5%分、一台につき約500円をプールしてそれをつぎ込んでいけば確保できます」という提案が職員からありました。それが「彩の国みどりの基金」です。これで4年間で3000ha戻せる。こういう一つの流れができるとともに、「浦高の森」、あるいは「浦和一女の森」という形が先行して、それに「熊高の森」ができ、他の高校でも検討していただく。そして「ヤオコーの森林(もり)」などの企業の動きも出てくる。

行政が足がかりは作りますが、最後はケネディでありませんが「国家が何を成し得るかを問う前に、自分で何をできるかを問え」と。だから県は常にそういうものを意識しています。恒久的な補助金にしない。運動体を作るには少し手間がかかるので、それを支援させていただく。基本的には、県民のムーブメント、自発的な運動を作る体系というものを意識しました。

＊

●両校の理念 環境問題へ

◆小川：そういう中で、6年前、浦高の同窓会が立ち上がったわけです。

◆川本さん：ここにいる内藤さんが先駆けて手掛けていたということから、浦和高校の110周年記念事業として「浦高百年の森づくり」の提言がありました。



21世紀はまさに環境の時代で、環境意識が問われます。環境問題をクリアしないことには何事も前に進むことはできない。同窓会総会で森づくりの事業を正式に決定したのが、平成

16年度。そして、その年の9月26日に、地主さんとの賃貸借の契約調印をして、翌年の平成17年10月1日に現地で記念植樹式と祝賀会を行いました。これには上田知事にもお出ましいいただきました。

おかげさまで、学校当局、現役の学生たちにスムーズに伝承されています。我々のアクションはいわばあの秩父連山につながる広大な山野の中で、はがき一枚、あるいは名刺一枚の面積かもしれませんが、それが千枚、一万枚となっていけば、やがてこうした活動が広がる。50年、100年という長期の展望に立った環境問題の取り組みです。【写真②】

◆小川：OBと現役を結び森づくりが軌道に乗ってきたわけですね。

＊

●地元と交流 次代に継承

◆川野さん：記念式典や植樹祭でキックオフしましたが、その後毎年春に植栽、



夏に下刈り、そして秋に間伐と、そういう活動が定着しまして毎回100人を超える人たちがそれぞれの活動に参加してくれています。同窓生はもちろん、生徒や先生、あるいは家族の皆さんに加わっていただいでい

ます。春の植栽では、もう2000本を超える木を植えていて、あとは補植や整備を続けることになるでしょう。ただ下刈りだとか間伐はずっと続けていなくてはならないことだと思います。【写真③】

おかげさまで、同窓生には森林の専門家がいます。植生、水質、気象なども調べています。皆さんのお力もお借りして、森づくりそのものが環境について、いろいろな変化をどう起こしているかの調査を進めています。

平成19年の7月には、現場の作業小屋となるログハウスが完成しました。寝泊りができる広さです。私たちにある意味触発されて、浦和一女やほかの高校の皆さんが森づくりを始めておられますので、私たちがしっかり森づくりをすることで、より多くの方々に森づくりの関心をお持ちいただきたい。現役生徒とOBの触れ合いも、森づくりを通して図り、地元の方たちとも親しく交流できる関係が作れればと思っています。

◆小川：一女側が動き出すきっかけはどういう経緯だったのですか。

◆菅野さん：私どもが内藤さんをはじめ、浦高同窓会の方々から森づくりのご提案をいただきましたのは、平成17年、浦高の森がスタートしてから間もなくのことでした。ご提案の主旨は、「森づくりで両校の交流の輪を広げましょう」。昨今、環境問題への認識が深まっておりますが、6年前に森づくりを体験



なさっておられた方はまだ少なかった。私たちも知識がなく、まず森づくりとは何だろう、ということから学び始めました。その後、実際に森づくりに参加したわけです。たとえ参加できなかったとしても、知ることにも大きな意味があると思いました。

一カ月後には、川越で開催された県主催のシンポジウムに参加。その後、浦高の活動に加わり、下草刈り、間伐、植栽を体験しました。【写真④】

途中、中村会長に引き継がれてから、平成20年の麗風会総会で森づくりが承認されるまで事態が進展し、多くの交渉や手続きを経て、昨年、浦高の隣接地に「浦和一女・麗風会の森」ができました。

*

●学生同士も交流

◆小川：引き継がれた中村さんから活動報告と意気込みについてお願いします。

◆中村さん：ちょうど平成20年の5月の総会で森づくり準備委員会発足及び予算の承認が得られたすぐ後に「彩の国みどりの基金」を活用した県民提案事業の募集がありました。早速応募し、それが非常に活動を後押ししてくれました。初めは1haからスタートし、その後1.59haに増やしました。【写真⑤】



浦高とは道を挟んでちょうど東南側に位置し、割となだらかですが、うっそうとしていて、陽があま

り入りこまず、手入れの行き届かないところでした。これを「太陽の光を通して風が通るような森に」と始めました。はじめは、四季折々の花が楽しめるよう、桜、ツツジ、アジサイとか、秋には紅葉、それで広葉樹の森にしようと。木々の伐採、地ごしらえを農林後者をお願いして進めました。

3万5000人の同窓生にはリーフレットを造らせていただきました。昨年秋には創立110周年記念事業として浦高OB・在校生含め180人参加の下、盛大に記念植樹式を行うことができました。補助金のおかげで記念事業が大きく背中を押していただいたと思っています。

これまで社会貢献の事業は同窓会としての組んでいなかったため、あえて森づくりに挑戦する必要はないのではと考える人が多かったのですが、浦高の森づくりにできるだけ多くの人に参加していただきました。候補地を見に行ったり、日本（やまと）水の水源地を訪ねたり、寄居町風布の方たちと素朴な交流を行ったりするうちに、自分たちが森の恩恵を日々受けていることが自覚でき、スタートの原動力となりました。

これからは継続していくこと、それから一女の在校生にも来ていただいて浦高生と交流してもらいたい。さらに長期的に森を楽しめるようにしていきたい。そんなふうを考えて進めています。

◆小川：浦高・一女の動きを中心に各方面に活動が広がっていきますが、仕掛け人の内藤さんに、最近の動きとこれからの希望・夢をお願いします。

*

●荒川の姿を昔に戻す

◆内藤さん：百年の森づくりを始めて14年目に入りましたが、おかげさまで活動の輪は確実に広がっ



ています。私たちの愚直な活動が評価されたものと思いますが、同時にここにいらっしゃる川本さんが設立された「公益財団法人サイサン環境保全基金」をはじめとする多くの団体、企業、個人からの助成金や寄付金のおかげで、活動を継続できたわけです。心

から御礼申し上げる次第であります。【写真⑥】

また、県からは技術の指導や借地の仲介など、県ならではの支援をいただき順調なスタートをきることができました。先ほど知事が運動体を作るまでの手間を支援するというお話をされましたが、正にその通りの対応をいただき感謝しております。

さてこれからの夢ということになりますと、安田喜憲国際日本文化研究センター教授の提唱する「森の環境国家」の構想ということになります。日本は今でも国土の67%が森林で覆われる、近代国家の中では最高の森林国家ですから、このアドバンテージを最大限生かせば、夢も希望もない閉そくした世界を夢と希望に満ちた世界に変えることができると

思います。

森の環境国家を大海とすれば、いま取り組んでいる活動は水源の一滴に過ぎませんが、その一滴にも夢があります。

一つ目は**荒川の本・支流に100カ所の百年の森をつくり、やせ衰えた埼玉の母なる川荒川を、清流がとうとうと流れる昔の姿に戻すこと**です。二つ目は**水源の森を守ってきた山村に昔のにぎわいを取り戻すこと**です。水源は原発よりも重要なインフラです。あらゆる生命の源となる水をはぐくんでくれるからです。その水源を守るのが山村ですが、主に経済的な理由で若者は山村を離れ、山村は今では限界集落といわれるまでになってしまいました。総合的な対策を講じ、若者が定住したくなるような環境を整えることが喫緊の課題です。三つ目は**森づくりを教員志望者の必修科目にすること**です。教育の現場で子どもたちに森づくりの意義や楽しさを教えれば、その子どもたちが受け継ぎ、百年の森が完成するのです。これらの夢が叶えられると大海はかなり近くなります。

◆小川：では最後に知事・両校にエールを一言お願いします。

*

●県の施策の先駆けに

◆上田知事：もっと早く気付けばよかったんですが、「浦高の森」「一女の森」の先駆けが結果的に県の森づくりのきっかけになっています。そして、「彩の国みどりの基金」創設が背中を押すような形となってきて、それがいい循環を作っています。結局水源地がしっかりすれば川の水の保水、水源地の保水能力が高まります。

山と川と海というのは、内藤さんが言われるように非常に水質もいいものが海に流れることで稚魚や貝やそういうものが育ち、また海産物の貴重なたんぱく源ですので、そういう意味でもリンクしています。こういうことを、子どもたちにも教えて「**生命はつながっているぞ**」としっかり理解してもらう。実は最近いろいろ起こっている児童虐待などの変な事件を減らすことになると思います。

本当におかげさまで、今、何らかの形で森づくりをしている大学や高校は全部で16ほどありまして、いろいろな関わりを皆さんが持つようになってきています。その上に企業や団体が森づくりに取り組んでいただいています。

埼玉県は民の力で盛り上げるというのを、**渋沢翁の精神からもふさわしい県だと私は思っています**。また、埼玉でうまくいくものはオールニッポンで比較的うまくいく話だと思いますので、いろいろなものを先導的にリードできれば、それは日本を変える力になると思っています。

*

座談会は以上で終わります。そして、紙面の隅に内藤勝久さんが「百年の森づくり」についての解説を語られています。

*

●【解説】百年の森づくり 県内に百カ所の森を NPO百年の森づくりの会 内藤勝久・理事長

最近各地で頻発しているゲリラ豪雨による土砂崩れは、地球温暖化の影響により異常気象が原因と考えられるが、全国的に進んでいる森づくりを担ってきた山村の限界集落化も大きな要因であろう。それでも埼玉県だけは県民のために命の源の水を守る対策は講じてくれるだろうと期待していたが、事態は一向に改善されなかった。そこで、山の荒廃に早くから気づいていた高い志の山男たちが立ち上がった。

平成9年10月25日、埼玉大学ワンターフォーゲル部OB会は、創部40周年記念事業として、「水を育む山への恩返し」を旗印に、埼玉の母なる川「荒川」最大の水源林和名倉山にて、最初の第一歩を踏み出した。平成12年に「任意団体百年の森づくりの会」、平成20年には「特定非営利活動法人百年の森づくりの会」へと体制を強化しながら、合計4カ所の百年の森づくりを手掛けた。

4年前から荒川の本・支流に百カ所の百年の森をつくることを目標にした「百年の森づくり運動」を展開。浦高、一女、熊高、秩父農工の同窓会やヤオコーの森づくりに啓発され他の高校や企業が追随すると確信している。この運動を通じ「水源の森は皆で守る」という世論を喚起して、山村に昔の賑わいを取り戻したい。埼玉県には森づくりや山村活性化の真のスペシャリストをそろえた専門チームを編成し、民の活動を支援していただきたい。

*

●いろいろな形で参加・体験することが大切

私が「浦高百年の森づくり」に参加するようになって4年目になるのでしょうか。それまでは、「森づくり」というのは遠い世界のことだろう、自分には何もできないだろうと思っていましたが、先輩に促されて参加した森では、100人以上の人たちがそれぞれのできることをすることで、3～4時間の作業で見違えるほど変わっていく山がありました。それぞれが春夏秋の年3回の作業に参加し、ポケットマネーの範囲での寄付をすることで、5haの森が維持できるのです。

県西部の寄居までは行けないが、私たちにも何かできないか…という地域同窓会の皆様の願いを込めて、昨年は春日部地区浦高会で「**春日部麗しの杜づくり事業**」を始めました。まだ2回の植栽しか体験していませんが、既に58本の植栽ができ、来月には下草刈りを行うことになると思います。大きな森とまではいきませんが、身近にあった鎮守の杜のような自分たちの生活に寄りそのような杜を育む活動にしていきたいと思っています。先日、嬉しいことに**春日部ロータリークラブ**の皆さんから、「子ども達に環境学習の大切さ、身近に自然の大切さを知ってもらふ活動をしたい」との相談をいただき、「**みどりの埼玉づくり県民提案事業**」と「**市の児童センター**」を紹介させていただきました。こうして県東部地域でも輪が広がっていくことを嬉しく思います。(o^o)